

指定文化財公開資料

江藤家住宅

国指定重要文化財 平成 17 年(2005) 12 月指定

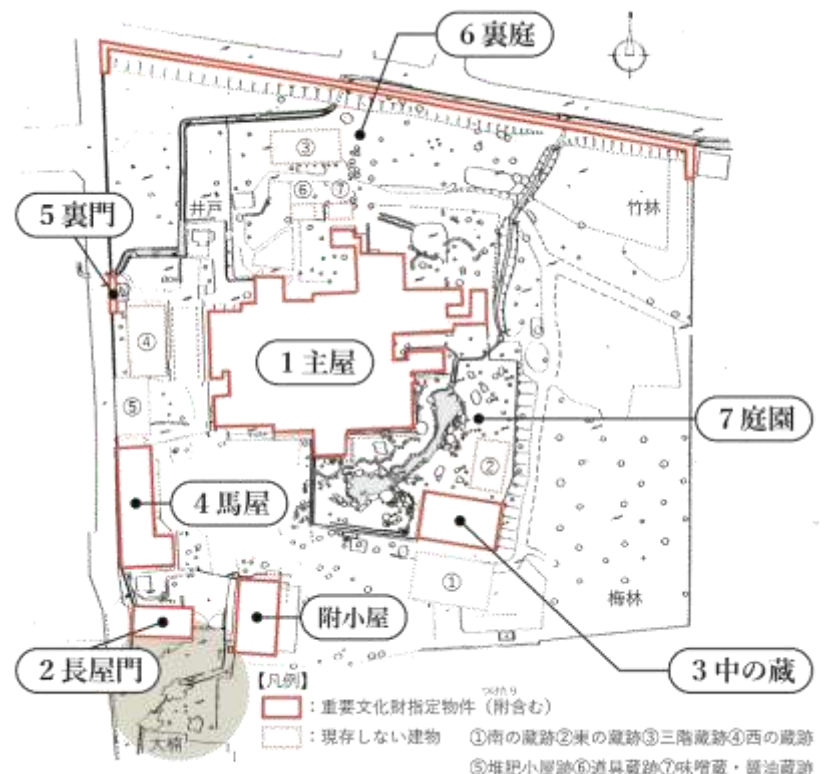
- 所在地 : 熊本県菊池郡大津町陣内
住宅面積 : 6,227 m² (1,887 坪)
主屋建坪 : 196 坪
1 階 157 坪、2 階 39 坪
附属施設 : 長屋門、馬屋、中の蔵、裏門、
小屋、井戸、石垣
庭園 : 肥後石組庭園
樹木 : 樟・椰(台風により倒木)・
木斛・柿・肥後山茶花
樹林 : 梅



熊本地震復旧後 (提供 : 松井建設株式会社)

建造物の特徴

- 主屋は、広間部及び土間と突出する座敷部と居室部が見事に組み合わせられており、複雑な外観や意匠的に優れた座敷など、大規模で質が高い。
- 熊本の民家が茅葺から棧瓦葺へ変化した時期を示す資料となる。
- 長屋門から蔵、馬屋などの附属施設が主屋を取り巻くように配され、水路や石垣を含めて江戸末期の屋敷全体の構成をよく保っている。



(提供 : 株式会社文化財保存計画協会)

概要

江藤家住宅は、大津町に点在する江戸時代の「在御家人」(郷土)の住宅の中でも、最も大型かつ建築年代の古い建造物の一つです。平成 17 年(2005) 12 月に国の重要文化財に指定されました。

主屋は文政 13 年(1830)には原形が整えられたと考えられています。主屋は敷地の中央西寄りに南面して建ち、周囲には長屋門、馬屋、中の蔵、裏門があります。住宅は、白川北岸の肥沃な田園を基盤とした豪農家としての面と、御家人格の向上に伴い成長を遂げた武家屋敷としての面をあわせ持っています。内部には、座敷部を中心に、幕末の優れた細川藩御用絵師や職人の手による贅を尽くした床飾りや障壁画が見られます。

江藤家住宅は住まい続ける中で、明治、大正、昭和と増築が重ねられ、各時代の質の高い内部意匠が良好な状態で維持されながら、現在も江藤家の居宅として使用されています。

平成 28 年(2016) 4 月の熊本地震で被災し、同年より 7 年に及ぶ災害復旧工事が行われています。現在は、「熊本地震震災ミュージアムにおける震災遺構」としても位置付けられています。

おもや 1 主屋

木造一部2階建。棧瓦葺。建坪196坪(647㎡)、1階157坪、2階39坪。23部屋。

煙出しをもった大屋根造の主屋は、基本的には熊本の典型的六間造りで、「匚」の字型の建築です。

江藤家が地方の豪農から、寸志差上げなどによって在御家人の地位を高めて行く中で、約4回にわたり造作が行われています。

現在の原形である文政13年(1830)の平面は右図のような規模であり、熊本地震後の復旧工事における解体時の調査から、広間2階の部屋もこの頃からあったと考えられます。

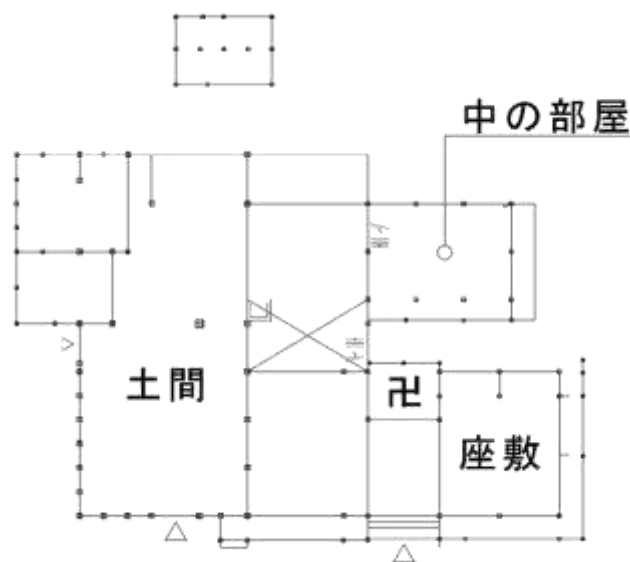
嘉永元年(1848)には現在の次の間の東に座敷(10畳)を拵げました。また明治18年(1885)に座敷・客間が修繕され、さらに明治31年(1898)に仏間の南側に客間(6畳)を増築しました。これに伴い、仏間の南側にあった式台の機能は、広間の南側に移されました。



主屋正面 熊本地震復旧後 (提供:松井建設株式会社)



南側座敷 熊本地震復旧後
(提供:株式会社文化財保存計画協会)



文政13年の平面図 ※想定
(提供:株式会社文化財保存計画協会)

ながやもん 2 長屋門

木造2階建。棧瓦葺。桁行12.6m・梁間4.0m。西側入主屋・東側切妻。

住宅の玄関として、樟の大木に守られるかのような白壁造・下見板張の造りです。敷地外部の西・南側にのみ彫刻を施した持送りを備えており、表構えを意識した意匠的特徴が見られます。

小屋組は東西に1本の大きな牛梁を貫き通してあり、その墨書から天保15年(1844)の建築と考えられます。1階は東2間が門で、西側が2室の物置となっており、2階の西側は棹縁天井の室で北側壁に入口があり、外階段が取り付けられていました。



熊本地震被災前 復旧工事中



熊本地震復旧後（提供：松井建設株式会社）

3 中の蔵

土蔵造2階建、棧瓦葺。桁行10.8m・梁間5.9m。
切妻造、西面入口庇付。

邸内に唯一現存する蔵です。鬼瓦には安永4年(1775)の銘があり、この頃の建築と思われます。

当初米蔵でしたが、今は道具を納めています。戦後は、この2階と現存しない南の蔵を繋げてアンコ製造所が置かれていました。内部には階段の跡があります。

4 馬屋

木造平屋建、棧瓦葺。
桁行16.4m、梁間4.5m。
切妻造、東面下屋庇付。

北側が3つに分かれる馬小屋、南側が物置です。物置東に待合所を増築しています。小屋組は南北に牛梁を貫いています。

鬼瓦に文政6年(1823)の銘があり、主屋や長屋門と構造技法がほぼ同じであるから、この頃の建築と思われます。



熊本地震復旧後（提供：松井建設株式会社）



熊本地震被災前
復旧工事中

5 裏門

木造薬医門、棧瓦葺。桁行2.3m、梁間1.2m。切妻造。

組物のない簡素なつくりの薬医門ですが、破風板には若葉付の渦文を施しています。渦文の形状から、江戸末期の建築と考えられます。

6 裏庭

邸内には、東の蔵・西の蔵・南の蔵・中の蔵・味噌醤油蔵・道具蔵・三階蔵と多くの蔵がありました。しかし、現在残っているのは中の蔵のみです。戦後こうした蔵は解体され、邸内にはその跡が残されています。

特に北側の三階蔵は大正末年に造られましたが、昭和33年(1958)頃解体されました。

また、屋敷北側には、高さ2.5mほどの石垣がめぐらされ、敷地を区切っています。途中で外側の水路を引き込んで、邸内西北の水廻りを形成しています。



石垣 熊本地震被災前



昭和 17 年 庭園と現存しない東の蔵 (提供: 江藤家)

7 庭園^{ていえん}

主屋の南側武家風の庭園です。ここには、主に常緑広葉樹が植えられ、座敷から見ると、廻り縁をめぐる広がりとお行きに驚かされます。

正面の泉水の石組は白川の石を集めて造られた「肥後石組」の典型で、民俗学者・宮本常一(1907-1981)が「熊本の文化がここにある」と感嘆したそうです。また、県下にあまり例を見ない榎・木斛の古木が一層の豪華さと落ち着きを見せていました(榎は平成 27 年(2015)の台風で倒木)。

江藤家

住宅の所有者である江藤家の祖先は、家伝によれば豊後国(現大分県)の出身で、主家・大友氏を関ヶ原の戦いに失い、江戸初期に肥後国(現熊本県)に移住したといわれています。一方、熊本藩は当時から大津を中心とする白川中流域を灌漑しようと、下井手、上井手などの大規模な水利工事を行いました。その後、江藤家初代である武左衛門が合志郡陣内村に定着し、白川流域の開発地主として、豪農としての道を歩み出しました。

江戸中期、財政難に悩んだ細川藩は、寸志(納金)を出した町人・豪農に対して武士格を与えました。こうした郷士を「在御家人」と呼び、武家に由来する豪農であった江藤家も在御家人でした。寸志は地域の安定・保全に尽くすことであり、江藤家は在御家人として代々人望を集めていきました。そのため、住宅は在御家人の屋敷としての装いと風格を重ね、肥後の“在”(地方の農業地域)においては特異かつ豪華な武家風の住宅に発展しました。

さらに、明治 16 年(1883)には、404 町 1 反 5 畝 18 歩(約 4 km²)の田畑を所有する県下屈指の地主として、県北に大きな影響力を持ち、有能な人材を多数育てました。自由民権運動が起こると、

ここは民権派の重要な一角を占め、明治中期から政界に進出した一族の江藤哲蔵が衆議院議員となりました。哲蔵は、大正 5 年(1916)には政友会原敬総裁の下で幹事長を務め、原内閣(1918～1921)成立の原動力となりました。戦後になると、農地改革により江藤家は 320 町(約 3.17 km²)の農地を解放しました。

その後、所有者の懸命の努力と、地域社会の中心・象徴として住宅を維持したいとする地域の人々の献身的協力により、今日に至るまで本来の所有者である江藤家の生活が続けられています。



大正 11 年 3 月 阿蘇窪田神社御幸行列記念
(提供: 江藤家)



平成 25 年 3 月 阿蘇窪田神社御幸行列記念